

常滑市民病院だより

発行者：病院長 鈴木 勝一
編集：病院広報委員会
第52号
2010年7月1日発行



「今年のフレッシュさん」

— 第52号の内容 —

- * 「患者様からのハッピーコール
ありがとうございます」
事務局長 梅原 啓三
- * 「離島の脳神経外科医療を経験して」
脳神経外科部長 半田 隆
- * 「グリコヘモグロビン (HbA1c ヘモグロ
ビン・エー・ワン・シー)について」
臨床検査センター技師長 千田 孝良
- * 「医師になって」
研修医 川合 真令
- * 「はじめまして」
研修医 山口 洋平

「患者様からのハッピーコール ありがとうございます」

事務局長 梅原 啓三

4月に赴任しました事務局長の梅原です。これまで市民病院は患者としてお世話になったことはありましたが、仕事をさせていただくのは、今回初めてのことになります。見ること聞くことが初めてのことばかりで、一から勉強のつもりで忙しい毎日を送っています。

市民病院には、医師をはじめ看護師、薬剤師、検査技師、放射線技師などの医療スタッフと事務職員、委託スタッフなど400人近くのスタッフが働いています。その中で患者様からは直接あるいは電話やお手紙でいろいろなご意見をいただいております。内容としては、病院の施設・設備のことや病院スタッフの対応に関する事などで、多くはお叱りの言葉ですが、時には感謝の言葉もいただいております。私は、これらのご意見を市民病院をよくして下さるハッピーコールだと思っています。

ご意見に対しては、できるだけ早く、そして、できることはすぐやり、すぐできないことは、いつま

でにできるかを、できないことはその理由を記載するなど、丁寧にお答えさせていただいております。これまで、お名前が分からない方には直接お答えできていませんでしたので、今後は、皆様の声が見えるように外来など院内に掲示していきたいと考えております。また、広報とこなめ6月号から「市民病院だより」としてシリーズで毎月、診療科目を紹介するなど、市民の方に市民病院のことをもっと知っていただき、ご来院いただきたいと思っています。

昨年度1年間で市民病院にご来院いただいた方のうち約8割が市民の方ですが、常滑市の人口の約3割の方にとどまっています。開院52年目となり、施設の古さは否めませんが、病院スタッフ一同、患者様の目線で患者様の気持ちになって、地域医療の拠点として市民の方から信頼され良質な医療の提供ができる病院をめざしております。よろしく願いいたします。

「離島の脳神経外科医療を経験して」

脳神経外科部長 半田 隆

2008年より2年2ヶ月、沖縄の県立宮古病院で働いてまいりました。離島と言えば、皆さんは、Drコトーや、このあたりだと篠島や日間賀島が思い浮かぶかもしれませんが。離島といっても、宮古島は、周囲100kmあり、常滑市の3倍以上もある大きな島です。人口は、5万5千人と常滑とほぼ同じ、市街地には何でもあります。市街地を離れると、サウキビ畑が広がり、まさに、“ざわわ〜”の世界です。白い砂浜、珊瑚礁、海は、息を呑むほど、青く澄んで美しいです。しかし、宮古島は、沖縄本島より西方300kmも離れており(東京-名古屋間ほどの距離)、交通手段は飛行機しかありません。

宮古病院は、宮古諸島での唯一の総合病院で、ベッド数300、医師40名、ICUもあり、最新の医療機器のほとんどが備わっています。私が、行くまでは、脳外科医が3年近く不在で、その間、脳神経外科の救急患者は、自衛隊のヘリで、頻繁に、沖縄本島に搬送されていました。なんとかこの窮状を解消し、島の人々を救えればと思い、宮古に行きました。在任中、くも膜下出血、脳出血、頭部外傷、脳腫瘍等すべての

手術を行い、島内で治療を完結させることができ、沖縄本島に一人も患者搬送することなく、脳外科の仕事を全うできました。もちろん、いろんな医療スタッフの協力応援があってこそ、できたことですが。

離島の病院で感じたことは、各科の垣根もなく、お互いに尊重、助け合いの精神が自然とできあがり、同じ方向を向いて仕事をしているという実感(いわゆる連帯感)があったことです。島の人々は、素朴でおおらかな方が多いのですが、看護師さんたちも、入院中の患者さんに向かって、“オバア〜、元気かあ〜”なんて調子で、身内に話しかけるように、親しみを込めて接しているのが印象的でした。(接遇上好ましくないと、内地では言われるでしょうが…笑)

地方の医療崩壊が叫ばれていますが、これといった処方箋はないようです。医師や看護師の確保もやはり大変なようです。ただ、病院は、病気を治すというだけでなく、患者さんを癒す場所でもあると、離島で働いてみて、改めて感じました。

そして、宮古島は、とても素敵でいいところです。皆さんも、機会があれば、一度訪れてみて下さい。

新任医師紹介

当院では4月より4名の新任医師が勤務しています。

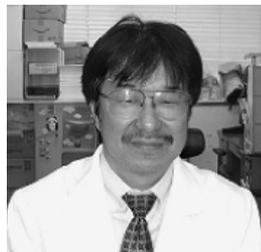
半田 隆
(はんだ たかし)

【所属】

脳神経外科

【前任地】

沖縄県立宮古病院



大島 景
(おおしま けい)

【所属】

循環器内科

【前任地】

名古屋大学付属病院



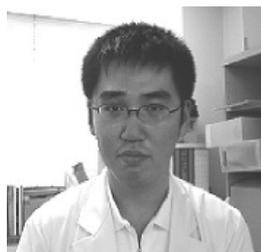
杵野 純一郎
(もくの じゅんいちろう)

【所属】

内科

【前任地】

聖霊病院



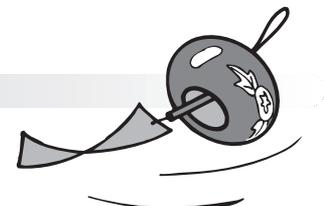
中島 正彌
(なかしま まさや)

【所属】

血管外科

【前任地】

名古屋大学付属病院



技術師会より

「グリコヘモグロビン (HbA_{1c} ヘモグロビン・エー・ワン・シー)について」

臨床検査センター 技師長 千田 孝良

グリコヘモグロビン (HbA_{1c} ヘモグロビン・エー・ワン・シー)は血糖コントロールの善し悪しを判断する指標となる検査です。

1. ヘモグロビンとは

ヘモグロビンは赤血球内のタンパク質の一種で、酸素と結合し全身の細胞に酸素を送る働きをしています。血糖値が高いと、血液中のブドウ糖がヘモグロビンに結合し、グリコヘモグロビン(HbA_{1c})というものにかわります。ヘモグロビンをクロマトグラフィーで調べると、A I (A₁)、A II (A₀)に分かれ、このうちA₁はa.b.c.d.eに分かれます。ブドウ糖が結合するのはA_{1c}の部分です。HbA_{1c}検査は、ヘモグロビンのうちグリコヘモグロビンに変わっているのがどのくらいあるか、その割合を調べる検査です。

2. 過去1～2カ月のコントロール指標です

グリコヘモグロビンは一度できるとその赤血球が死ぬまで消滅しません。そして赤血球は約4カ月の寿命ですから、HbA_{1c}検査はその平均年齢ともいえる、過去1～2カ月間の血糖コントロール状態を反映したものとなります。病院の検査で糖尿病が悪くなっているといわれるのがいやで、検査前の数日間だけ食事療法を一生懸命やる人がいますが、それはHbA_{1c}検査ですぐにわかります。

3. HbA_{1c}検査が重要な理由

HbA_{1c}検査は血糖コントロールに関する検査の中で、一番長い間のコントロール状態をあらわす指標です。糖尿病は高血糖状態が続くことで起きる合併症(糖尿病網膜症、糖尿病腎症、糖尿病神経障害)が怖い病気です。長期間のコントロール状態がわかるということは、治療上、非常に大きな意味を持っています。アメリカで行われた調査研究では、HbA_{1c} が1割下がると(例：10%→9%)合併症の一つである網膜症が悪くなる危険が40%以上減ると報告されていて、HbA_{1c}1%の違いが合併症の進行を大きく左右することがわかります。

4. HbA_{1c} 7%以下を目標に

HbA_{1c}は糖尿病治療の重要な情報源です。糖尿病といわれたら定期的にこの検査を受け、より良い血糖コントロールを続けましょう。目標は、HbA_{1c}7%未満(できれば6.5%未満)です。健康な人の上限は5.8%です。

5. 当院の自動グリコヘモグロビン分析機が新しくなりました。

今春より、当院の自動グリコヘモグロビン分析機が、最新式に変わりました。1検体当たり1分の高速測定を実現、測定前の予備動作(ウォーミングアップ)時間を大幅に短縮し、測定結果を2分で報告することが可能になりました。HbA_{1c}測定の診療前検査は、患者様サービスの向上、糖尿病チーム医療に貢献しています。

6. 糖尿病の診断基準(6.1%以上)に加えられました。

本年6月に糖尿病学会において新たな診断基準にHbA_{1c}が加えられました。

技術師会とは常滑市民病院内で働く、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、栄養士、ソーシャルワーカー、視能訓練士などのコメディカル職員で組織される会のことをいいます。今年度より臨床検査センター千田技師長のもと、新体制で技術師会がスタートしました。よろしくお願いたします。

今年度より当院で働いている研修医の先生を紹介します。

「医師になって」

研修医 川合 真令(かわい まさはる)

四月から研修医として常滑市民病院で勤めさせていただいています。初めは新しい環境と医師になったばかりという事で期待と不安でかなり肩に力が入っていました。ですが、気がつけばもう2カ月半も過ぎています、少しずつ環境には慣れてきてはいるのですが、覚えることばかりで、未だに常に満身創痍です。

この病院で研修をするにあたっての良い点の一つとして、様々な手技をたくさん経験させてもらえるという事があります。静脈ルートの確保、血ガス、胸水に対してのトロッカーの挿入、気管挿管、中心静脈カテーテル、ルンバール等たくさん経験させていただいています。と一言で言ってしまうと聞こえは良いのですが、言うは易し行うは難し?で毎回一つの手技を無事に終えるたびにホッと胸をなでおろし、気が付けば、汗だくになっている自分がいます。初めの頃はいつ何をやらされるか分からないから、正直不安な思いもあったのですが、最近ではその緊張感をむしろ良い意味で集中して楽しむという、ある意味開き直った感ができてきました。やはり実際に臨床の現場での医療とは学生の時に勉強した教科書とはなかなかかけ離れたものがあり、戸惑うことも日常茶飯事です。



医師としては未熟ですが、患者さまや、指導してくださっている先生方、そして先生と声をかけて下さるナースやコメディカルの方がたに少しでも貢献できるようこれからも努めていかなければという思いで日々過ごしております。

「はじめまして」

研修医 山口 洋平(やまぐち ようへい)

研修医1年目の山口洋平と申します。常滑市民病院で研修医として働かせていただいているのは3ヶ月が経とうとしています。4月の新人研修を終え、5月は循環器内科、6月は消化器内科をローテーションさせて頂いています。この3ヶ月間で感じたことは、病院には様々な職種の方が働いていて、それぞれが関わりあいながら仕事をしている事です。たとえば、処置に使うハサミ一つについても、使う前には滅菌や消毒をしてくれ、使った後には洗って、また滅菌や消毒をしてくれる人がいます。文章にしてしまえばすごく当たり前のように感じますが、3ヶ月前の自分はこの様なことが分かっていなかったように感じます。1つの事をするにも、その裏には、表からは見えないたくさんの方が動いていて、そのおかげで自分はその事が出来るのだと1つ1つ感謝しながら仕事をしていけたらと思います。



編集後記

新卒の看護師13名、診療放射線技師1名が各部署に配属されました。現場で働く上での知識は持ち合わせておりますが、先輩スタッフに比べれば、何かと行き届かないところもあると思います。これからは各医療現場での経験を重ね、一人前の医療スタッフとして活躍できるよう頑張りますので、温かく見守ってください。

(編集担当 中谷)